



市民運動



川崎ゆきお

「最近はどうですか」

「ああ、引きこもってますよ」

「引きこもりですか」

「引っ込んでいます」

「たまには外に出た方がいいですよ。世の中まだ営業していますから」

「用があれば出るのですが、仕事をなくすと駄目ですねえ。外に出る用事がない。まあ、家でやる仕事でも、外での用事も出来る。今は遊びに行く程度ですよ。外に出るのは。すると、これは、まずいのです」

「まずいとは」

「遊ぶとお金がかかる。電車賃もそうだし、外食もする。仕事をやっておればいいのですが、出る一方だ。外に出ると金も出る。出さないようにするには、外に出ない方がいいって、なってきましたね」

「いやいや、その辺を散歩する分には一円もかかりませんよ」

「いや、それでは楽しくない。やはり、珍しいものを見たり、イベントを見に行ったりとかでないかね。この近所をうろついているだけじゃ、面白くもなるともない」

「それで引きこもりですか」

「だから、用事があれば出ますよ。出ないのは逆に仕事なのです。稼いでいないのだから、減らさないようにする仕事ですよ」

「一円も使わないで、近場をうろうろしている人もいますよ」

「はい、そのうちやってみますよ」

「この近くに川があるでしょ。その淵が公園のようになりましてねえ。昔はドブ川だったけど、今は下水は流れ込まないので、結構綺麗ですよ。それに護岸工事で、ゴミが消えて水も綺麗だ。コイなんなんかを放し飼いでますよ。かなり大きいです。季節になると鳥が飛んで来てますなあ。これも大きな鳥ですよ。亀も 誰かが放したのでしょうかねえ、甲羅干ししてますよ。目から首にかけて赤い種類です。きっと名前があるんでしょうなあ。そういうのを私は見るのが楽しみなんです」

「それでは世捨て人のような感じがしませんか」

「します。します。もう何もやることがなくなったので、そんなことしているような人にね」

「やはり、そんなことでしょ」

「そんなことです。詰まんことです」

「いや、私は、まだ仕事をやりたいのでね。それを待っています」

「そうですか。僕は仕事もなくなりましたので、本当にやることがない。だから、そんなことが出来るようになったのです。これは特権ですよ」

「なるほど、誰にでも出来るが、その心境にはなりにくい事柄ですねえ」

「そうです。なくしたからこそ得られる世界もあるのですよ」

「あなた、水鳥や亀が好きなのですか」

「いいえ、特に。鳥の名も亀の名も知りませんし、調べるつもりもありませんよ」

「護岸工事で、コンクリートで囲んでしまい、自然が……」

「亀もコイも、鳥も来てますよ」

「私は、やることがいよいよなくなれば、市民運動に参加したいと思っています」

「あ、そうですか」

しばらくして、二人は公園で再会した。

引きこもっていた男は大勢の中に混ざっている。何かの団体のようだ。

「これは何の団体ですか」と、彼は聞いてみた。

「運動の会です」

「はあ」

「市民運動同好会です」

「スポーツですか」

「はい、体操や太極拳なんかを。また、歩くより遅く走る分会もあります」

「あ」

了